

速夜の女

馬場 駿

駅前からスマートホンの地図を頼りに辿り着いてみると、間口の狭い七階建てのノックビルだった。外壁は白と黒が絶妙の割合で共生をしていて、いかにも葬祭関係の施設らしい。

プチメモリアルビルというアーチ状の看板をくぐって中に入るとフロア全体がフロントロビーになっている。ビル自体の床面積が小さいらしく、何とも可愛らしい感じがした。興味深げに立ち尽くして内装を観ていると、ファッションモデルかと見紛う容姿の二十代と思しき女性が寄って来た。

「お電話いただいた氷室詩織さまです、わたくしインフォメーション担当の磯貝みつほと申します、よろしくお願いいたします」

そう言うと、極上の丁寧さでお辞儀をした。

「ご遺体は最上階で眠っておられますので、ご案内をさせていただきます」

言葉少なで通したいので、一礼をしたあと彼女の後ろに着いてカウンターに進み、香奠こうでんを手渡し芳名帳に住所氏名をしたためた。先導されてエレベーターの前に着くと、そこで不思議な言葉に出会う。

「隣の階段で上ることも出来ませんが、どうなさいますか」

最上階なら七階なのだ。通夜なので和装の人だけではないとは思いますが高齢者もいるはずだ。エレベーターと階段の選択を迫ること自体、業者としては常軌を逸している。少々呆れたのだが口が勝手に返事をした。

「階段で行きます」

担当の彼女が、何か理由を教えてくださいのような気がした。物書きの端くれとして好奇心がうごめいたのかもしれない。

「亡くなったことを認めたくない方が、階段を選ばれるような感じがしています、もちろんご高齢の方は無理だと思われてか、お一人もいらっしやいませんか」

「踏み絵なのね、故人に対する愛情の深さを量る」

「とんでもございません、そんな思いあがったことは」

「ねえ、もっと友だちみたいに話してくれる、なんとなくだけど、あなた好きだわ」

自分も寡黙の演技はやめたくなった。柄でもない。

「わかりました、ではそのように」

素直に応じるのかと、また驚いた。

あつと言う間に三階に達した。あと少しで三十六だが、自分はまだまだ若い方なのかもと、少し嬉しくなった。

「あなた前職は何。ずつとここじゃないでしょ」

失礼だが、会話をしていると早く最上階に着けるような気がした。

「女子アナでした、某テレビ局の」

「やっぱり。どこか違うと思ったのよ」

「わたしにだけ言わせませう？」

足を止めて彼女が覗き込むようにして微笑んだ。

「結局雑文家かな、ゴーストライターなのに小説家を気取って、恋人を袖にしたバカな女がわたし」

「そのお相手の男性が加賀誠也さま」

残酷な念押しが見事だと、ますます気に入った。

「自殺じゃないわよね、彼」

かなり乱暴な質問をした。彼女は監察医ではない。

「季節外れの豪雪で車ごと閉じ込められた結果だそうです、聞きかじりですけど」

「あー、排ガスで窒息……：そうになると寒いからエンジン切れないものね。その現場、どこだか知っています？ もちろん、聞きかじりでいいけど」

自分の郷里が雪国の富山だけに、まさか彼が追って捜しに来てではと不安になった。

「裏日本とだけ」あとは口をつぐんだ。

「上手いわ、あなた」

「元彼女ではご遺族の方も詳しくは教えてくださらない？」

「痛いところ突くわね、当たり前でしょ」

小気味がいいので、つい笑ってしまった。

「きつと妹さんですね、訃報を届けた人」

一瞬ドキリとした。

「なぜ解るの」と穏やかに訊き返した。

「今日いらした方で誰の目にも分かるほどの涙を見せた唯一の方なので、きつと故人の心の奥にも通じていたはずと、いえ、ただの当てずっぽうですけど」

「着いたわね、七階」と逃げをうった。質疑を続ければきつと、危ないところへ行きついてしまう。

「お疲れさまです」

「楽しかったわ、あなたで良かった」

「このドアからはご遺体のお部屋に、隣のドアからは、夜通し故人を偲び、香を絶やさな

い方々の控室に入れます。もつとも中仕切りを手で開ければ二つのお部屋はつながります。ちなみにこの時点でもなたもご利用ではありません。わたくしはここで失礼しますが、フロントに深夜まで詰めておりますので、何かございましたら内線電話でお申しつけください」

ここからは友だち風から担当社員に戻るといふ宣言らしい。「深夜まで」をあえて加えたことに少しばかり怖さを憶えた。まだ午後九時なのだ。普通の弔問客なら一時間以上は居ないだろう。この女性には心の中まで見透かされているような気がした。

ドアを開け中をあれこれ説明をするかと思いきや、磯貝嬢はエレベーターの前まで移動してしまつた。

「あの……」とさすがに何故だと訊きたくなつた。

「手前でもで開けて入室を急かすようなことはいたしません。お客様の中には結局お入りにならずに帰られる方も少なからずいらっしゃいます、そのところはおお客様がお決めになることです。では……」

エレベーターが到着し、彼女は会釈をしてから中に消えた。

ほの暗い部屋に入ってドアを閉めたとたん、床から冷たい靈気のようなものが足先からふくらはぎ、さらに腿、ついにはその付け根まで這いあがってくる感覚に襲われ、さすがに棺まで一直線にはいかなかった。線香の煙が天井へと向かい、中ほどまでいくとゆっくりと横に広がっていき、部屋に満たされた淡い香の霞の中に溶け込む。

すぐ遺体に会うには曰く言い難い勇気が要る。

激しく求めあい、奪い合い、そして燃え尽きた片割れが、高熱で焼かれ蒸気になって消え灰と骨だけになる前の一夜をこの狭い部屋で、独り過している。可哀想だった。きっとこんなことだろうと、遺族から頼まれもしないのに夜通し傍に居てやろうと心に決めてきたのに、磯貝嬢の言う通りだ、棺に接し、覗き窓から死に顔を見て、彼の死を確かなものとして認めてしまいたくない気持ちはまだ残っている。

それでも、一步を踏み出した途端に迷いは消えた。小さいはずの靴音が、凍り付いたような壁や天井に跳ね返され力を増して耳に入ってくる。

少し怖いので「誠也、来たよ」と声にしてみた。

いまの自分は通夜の客ではなく見舞客なのだと言ひ聞かせて、覗き窓の傍らにあった淡い光のランタンを手にした。一年ほど前まで自分の命の半分とまで思っていた男の顔が、浮かび上がり近くまで寄ってきた。

胸の奥から突き上がってくるものがあり、その想いの塊が涙を呼んだ。両の目からあふれ出たものが雫となって落ちる。それは彼の額と頬の上で撥ね、微細な粒々になって広がり落ちた。その光景がスローモーションで心の目に映る。

「まだほんのり赤い頬、生きてるみたい」

反応は無い。これからもずっと眠りが深く長いのに違いない、永眠なのだから。人は皆毎日、ときが来れば眠る。必ず眠りから醒めるといふ保証もないのに。臨終のときも同じだろうに、恐れたり取り乱したりする。考えてみれば不思議に思える。永遠に起きられないという結果が死だとしても、その結果を認知する本人はもう居ないのだから。

「起きて何か言つてよ」と頬を撫ぜた。まだ柔らかみが残っている。

次いで自分の唇に指をあて、少し湿ったところで彼の唇に押し当ててみた。

「久しぶりだね、こんなことするの……」

童話だったなら、これでお相手は目覚めるのに。そんな子供じみたことを想った。

「これでもだめ？」とつぶやいて、直接のキスを試してみた。鼻に詰められた白が息苦しいうなので、触れている時間は短くした。

静かな二人だけの時間になっている。

線香をたてなおしたとき、フツと疑問に思った。短くなりつつも赤く点いていた線香は誰がたてたのだろうと。さっきの磯貝嬢、きつとそうだと思った。

あらためて周囲を見渡した。明日祭壇を飾るのだろう、白い菊花が詰められた花籠が数個壁際に並んでいる。あれほど言ったのに彼は会社を辞めてしまったのだろうか、職場を連想させる文字は一つも無かった。

「バカなこと考えないの！」

急に蘇ったあのとときの自分の言葉。

すべては私のせいだった。小説世界に入り込んだら最後、脱稿までの間、ほとんど日常生活に必要なことをしなくなってしまふのだ。文字通り寝る間を惜しむだけならともかく、掃除、洗濯から買い物、料理まで怠り、入浴することさえ億劫になる。そんな思いをして投稿した回数は二十を超えたが、主催者から何の知らせも無い選外が続いている。何が足りないのか、どこがいけないのか。誰一人、知らせても教えてもくれなかった。誠也も同じだ。身びいきで甘く褒めるだけで、本音らしき辛辣なことはいつも口にしなかった。もちろん世辞だというのはこちらの推測に過ぎないのだが。

ある日、彼は目を輝かせ決心したと言つて胸を張った、在宅勤務で済む仕事にシフトすると。そうすれば家事もやってあげられると。聞けば予定している仕事は、ほぼ昔でいう内職に近い。請け負う量が不安定、だから収入も不安定になる。将来のある三十前の未婚の男が考えることではない。クリエイティブな内容ならまだしも、単なる下請けでしかないからだ。私と同じ世界に堕ちようというのか。それにいまの勤務先は人もうらやむ大手企業なのだ。

「出て行つて、ここわたしの夢の職場だから。君の迷いのあれこれで、気持ち搔き回さ

れたくないのよね、正直なところ。君とのお遊びはもう終わり！」

彼のためだだと本気で語気を強めた記憶がある。青ざめた顔で感情を押さえていた彼の表情は、いま見ている死に顔よりも血の気が失せて哀しそうだった。

「……御免ね」

目を開けない彼の顔を見続けるのが辛くなり、棺に体を預けるようにして床に膝をついた。

すると棺の上板の先に厚めの本が見えた。菊花の籠と籠の間に居る。

「本？ なにそれ」

首を傾げ反対側に回って手にしてみた。灰灯りの中でもタイトルは読める。

「てのひらの上で地球を転がしてみたい私」

あえて声を出してみた。タイトルが変えられている。

手紙文も満足に書けない人気アイドルのココ・真奈からの聞き取り、テープ起こしを源に、自分がゴーストライターとして創った彼女の自伝的小説だった。嘘と妄想に満ちていたが、なんと二か月で十萬部を超えて売れたという。

「まさか火葬前にこれ、棺の中に入れるつもり？」

思わず本の表紙を手のひらで叩いた。

そうなら誰が置いたのかは知らないが持ち帰る。それが罪だとしても盗み出す。たぶん、実はアイドルではなく私の作品だと知っている人の発想だろう、彼に、一緒に煙になって空の上で読んでという……。

「そうなら優香さん、しかないな」

彼の妹だと勝手に決めたとたん、俄かに生まれた怒気はサッと消えた。悪意が無いと解かるからだ。彼女は二人の同棲を祝福してくれた唯一の理解者だった。

そうと分かっても他人の名の著書で、売らんかなで綴られた物語を彼と一緒に焼かせるわけにはいかない。想いがそこまで来て新たな落ち込みに見舞われた。かつて愛した男の棺に入れてあげる、それに適する一冊の本も出せていないという自分、それは彼と距離を置き、最終的に別れたことの妥当性を補強するに充分すぎるものだった。そう、自分には釣り合わない。

ハードカバー本の表紙にしっかりと自分の指紋を付けたことになる。それでいい。いまの駄目な自分を連れて旅立ってくれていい。

本を元の場所に戻した私は無様に沈みこんだ。

どれくらい時間が経ったのだろう。

体の節々の痛みを感じて上半身を起こした。タイルの床の上で眠っていた。意識を失っ

ていたという方が適切かもしれない。寒気を感じた。弔問なので黒尽くしの格好だが、どんな姿で仮眠しても平気なようにパンツルックにして来たのが奏功したようだ。

自分が横になっていた位置から想像するに、彼に添い寝をするつもりだったのだろう。フツと笑いが出た。

「いかにも少女趣味」と、口にも出してみた。

それでも、そういう「自分」は嫌いではない。いま現実の自分は、自堕落とも言える日常の中に居る。だからこそ見失いたくない「自分」だから。

ひと月ほど前、出版社での打ち合わせの帰りが夜半近くになった。まるで安手のドラマだが、暴漢二人に襲われた際助けてくれた屈強の男と一夜を明かした。争い合った中で彼が利き腕の中指を骨折したからだが、翌日からずっとあれこれ世話をしているうちに極自然な形で同棲状態になった。男は派手な喧嘩の仕方からは想像できないほど心優しくまともな人間だった。仕事のことを口にしないのも怪我のせいだと思い、聞きもしなかったのも未だ実は何者なのかについて分かっていない。あえて確かめないうちに住所を正式に移してもいる。まるで流されている自分を楽しむかのように。

また線香を更新した。そのあとで、手で開けられるという中仕切りの戸襖を開けてみた。

隣は和室だった。いつの間に来て気遣ってくれたのか。室内は常夜灯が二つ点いていて全体が見渡せし、弱に設定され微風ではあるが、エアコン暖房が施してあった。

「うん？」と疑問が湧いた、遺体が傷むのではと。

一灯だけ正規の明かりにしてみると、やはり大きな注意書きがあった。『中仕切りは常にきちんと閉めてください』と。

慌てて閉めてから、崩れるようにして横になった。

何人夜明かしをするか定かでない以上、雑魚寝ができる畳の部屋は正解だ。インターネットでこの施設を確認したときに解説を読んだ。本葬はせずに、家族とごく親しい知人だけで執り行うかたちでの密葬に特化したサービス施設だと。

一見白壁のように見えるが木製の三本の縦棧らしきものが見える。目立たないけれど押入れらしい。そう気づいたのに、再び襲ってきた睡魔に負けて、寝具の有無も確かめずにそのままの格好で眠りに落ちた。

ドアのノック音で目覚めた。睡眠が浅いのは、このところ毎日のことだ。だから不断に眠くなる。今日もゴーストライターとしての最後の仕事に追われていた。

入って来たのは私服に着替えた磯貝嬢だった。

「よろしかったら六階でコーヒー飲みませんか？ わたし、男性社員への引継ぎが終わって解放されたの」

「いいわね、でも喫茶とかこの時間でやっているの」

「いえ、六階給湯室が職員の仮の休憩室なので、もう誰も居ませんし、どうぞご一緒に。お線香は更新してありますから」

「あ、いろいろ気を遣ってもらってすみません」

「いえ、普通のことしかできていません」

「いま何時ですか」

「十二時十五分過ぎ」

駄目な弔問客だなど苦笑して、あとに従った。勤務違反で逮捕されたような心地がした。

「わたしコーヒーには凝ってしましてね」

「ほかの人の分も、自腹で？」

「まあ、自分だけっていうのも飲みにくくなるし」

給湯室は予想に反して広かった。テーブルは二台、椅子は四脚、折り畳みが五脚。壁に掛かった絵も小洒落ているし、カップはコーヒー専用の薄手のものだった。

「差し支えなかったら、でもいいけど、彼の妹の他に親族の人とか、たくさん来たのかな」

馨しい香りを楽しみながら、自然な感じで聞いてみた。単なる数字なら個人情報とまでは言わないだろうと踏んだ。

「密葬ですからね、当然少なくなります、五人でした」

両親、長男と妹で四人なので、あと一人になる。少しして思い当たった、妹の婚約者だ。

「寂しかったわね、彼」

「その分、氷室さんがずっと居てあげている……」

「優しいのね、あなたは、ものごとの捉え方が」

「それはあなたです、久しぶりに感動しています。通夜って言いますけどどちらの社長に言わせると、本当は霊と肉体を分離する火葬の日に逮おぼぶ夜、逮夜といって死者を送るについでとても意味のあるものだそうです。あなたはその夜を大事にしている」

「タイヤ、ですか」

「逮捕するとうときのタイという漢字を使います」

「恥ずかしいけど初めて聞くわ。こそこそと眠っちゃったけど感動するの？ それでも」

「だって別れた彼ですよ、わたしなら振り返りもしないですよ、万一外で出遭ったらそっぽを向きますし」

「すごい。でも憎くて同棲を解消したわけじゃないの」

「だったらなおさらです」

「きついな、でもそれ、相手が生きている場合でしょ」

いつの間にか簡単に事情を話している自分がいた。

「彼のために小説を書くのをやめようとは思いませんでしたか、一度も」

「自分が自分であるための証を捨てると言うの?」

「ああ、そういう考え方もありますよね、確かに」

「一度も公募で認められたことないから、今の、ちょっと偉そうだったわね、ごめん」

「いいえ。以前奥様を亡くした小説家が言ったことがあります。後ろ指を指され悪者になって初めて人様の心を揺り動かすものが書けるって」

「わたし、いい人な訳ね、励ましの言葉をありがとう」

では自分もそろそろいい小説が書けるかも。後ろ指を指されるのは時間の問題でしかない。そう思った。

「ところで磯貝さんはどうして某テレビ局を去ったの?」

意地悪で訊くのではない。一見して非の打ち所がない女性に見えるからで、不思議だからだった。

「ありふれた不倫、局内でわたしも相手も呼吸すらできないことになって、部下の私自分から悪者に」

磯貝嬢は少しためらったあとで静かにそう言った。

「じゃ、同じじゃないの、大差ない」

「ふふふ、だから何となく気になったのかしら。あ、ごめんなさい、迎えに来る時間です」と撥ねるように立ち上がった彼女。

「もしかしたら新しい彼氏?」

「はい、当たりです」と空になったカップを素早く取ってシンクに向かい、洗い始めた。人懐こくて前向きで若々しい彼女に少し嫉妬した。

「じゃ、わたし彼のところへ戻るから」

「朝八時に親族の方がいらっしやるそうです、それと何時に帰られてもさつき交替した男性の担当がお線香を管理しますから大丈夫です」

「はい、いろいろありがとう」

胸元で小さく手を振って廊下に出た。さよならは言わなかった。また会いたいからかもしれない。

おしゃべりをしたからだろうか、独りで戻った遺体が眠る部屋はひととき寂しかった。

それにしても、ともしっぱなしの線香なのに部屋全体が激しく煙ってしまわないのは不思議に思えた。最初から通夜に合わせて設計したとすれば、はつきりとそれとは分らない特殊な換気装置が在るのに違いない。

部屋の隅にあるしつかりとした椅子を棺の横に運び腰かけたところ、覗き窓をあければ

故人の顔が見える高さだった。この配慮には少し怖さを感じた。

しかしそれもすぐに消え去り、有難く思えて来た。彼の顔を見ながら話しかけることが出来るからだ。

「五時になったら行くね。本当のお別れ、告別式にも出ないし火葬場にも行かない。それでいいよね」

磯貝嬢によれば、火葬は霊と肉体を分離するものだという。たぶんそうするには焼くしか手立てが無いのだろう。たしか釈迦も荼毘、つまり火葬だった。肉体は高熱で蒸発し骨だけが遺るが、顔すら形を失い髑髏むくろにすらなれない。収骨室さうこつしつで最後に見る誠也の姿が骨のカケラだなんて堪えられない。想い出すときにどうなるのか。そう思った。

「いま見ているこの顔がいい」

焼かれ分離されたあと、霊はどこに行くのか。この社長は彼女にそこまで教えたのだろうか。もうすこし詳しく聞きたかった。たとえばいつか、自分の処へ彼の霊が訪ねて来たとしたら、それは死への誘いなのだろうか。想い出すということは霊を呼び込む行為なのだろうか。また、彼を忘れないということは霊を惑わす結果になるのだろうか。

ふだん、思いもしなかったことを、彼の動かない穏やかな死に顔が考えろと促してくる。

すこし息苦しくなつて立ち上がろうとした。ところがなぜか脚に力が入らない。すぐさまドスンと尻を落とした。

「は、傍に居ろということ？ はいはい」

彼の最初で最後の我が儘かもしれない。何一つ願い事や苦情を言わない男だった。いや、本当のところは、エコノミークラス症候群と同じことなのかもしれない。やや体を固くして慣れない椅子に座り続けていたからだ。

私はいったい何をしに通夜に来たのかと自嘲した。昔からの持論では、葬儀など虚しいものだと一貫している。死んだ人が自分の中で真に死ぬのは何も思い出さなくなったその時だと思うからだ。だから彼の死を火葬で確認してはならないし、その前日の儀式である通夜も同じ理屈で否定するべきだった。それなのに香典を係に手渡し、線香をたて、合掌して冥福を祈っている。そしてまた彼の死に顔を飽くことなく見詰めている。

「会いたかっただけ」

追い出したくせにと、彼が青ざめた顔で黙りこくっている。見たくない現実を勝手に曲げたいだけかもしれない。これからはたぶん、思い出すことが罪になる。

「言い訳だけど、それでいいでしょ？ 誠也」

時計を見た。午前五時を回っていた。

新しく線香に火を点けて、小さな炎を手で煽いで消した。怒ったように煙を増やす極細の緑色。

「途中で切れたらごめん」

もう一度彼の顔をじっと見て、「さよなら」を口にした。

中仕切りを経て隣室に入りエアコンを止め、灯りを消して廊下に出た。閉じたドアに背凭れて、しばらく動けないでいた。

ビルを出たとたん冷たい風に襲われた。

淡い闇とでもいうのだろうか、街灯が少しくぼやけ、低めの近くのビルでさえ点描画のようにはかなげに見える。電車に乗るために最寄りの駅まで歩くという選択は、さすがに引っ込めなくなった。フロントでタクシーを呼んでもらおうと思えば斎場のロビーに戻ろうとしたときだった、こちらに近づいてくる二つの光がある。渡るに舟か、期待は小さかったがとりあえず足を止めた。

「詩織さん帰るのね、やっぱり」

目の前に停まったタクシ一の客は誠也の妹の優香だった。彼女は車を半ば降りた格好でハンドバックから財布を出し料金を払う所作を続けながら言葉だけを私に向けて発している。

「夜通し居てくれると思って遠慮したの、わたし。でも万一あなたが来なかったり、途中で帰ったりしたりしたら兄貴が寂しいだろうなって思い直して。ううん、居てくれたら会いたかったってことね」

顔を合わせては帰り難くなる。遺族の中で唯一好感を抱いていてくれる相手に引き止められればそれは不可能に近い。そんな想いに囚われたせいかな、自分でも意外だったのだが声すら出ずに突っ立っていた。

「このまま少し待っててくださいる？」

タクシ一に待ちをかけ、きちんと向き直ったときは満面の笑顔だった彼女に救われて、「お久しぶりです、葬儀のこと、お葉書で知らせくださってありがとうございます」と、やっとのことで挨拶をした。

彼女は小さく首を振ると最も恐ろしい言葉を口にした。

「いえ、あなたに逢いたくて雪国まで捜しに行った兄貴だからきつと、焼かれる前にあなたの顔が見たいだろうと思ったの」

やはり自分が彼の命を奪ったことになるのか。誠也が以前二人で暮らした住いを訪ねたりせずに予め手紙を出してくれていたなら現住所に転送されてきただろうに。擦れ違いは二人の想いの中に依然として残っていたらしい。

誠也の死因に繋がる話をしたとたん、笑みが消え目を潤ませた妹に、深々と頭を下げるしかなかった惨めな私。それが解かるから通夜に来たのだし、焼かれる前に帰るのだ。こ

の気持ちが無理解できるとしたら目の前のこの人しかない。ただこのタイミングで納得してくれるかどうか。

長い沈黙の謝罪の後でゆっくりと頭を上げた。

目の前にドアの開いたタクシーだけが居た。

「どうぞ」の声に斜め後ろを見ると彼女が手で乗車を勧めている。その表情は険しくはなかった。

「ごめんなさい、優香さん、許して」

本当は何に罪を感じて、誰に懺悔しているのか。結局自分自身で、自分の本心にだと、シートに沈みながらそう思った。急に涙が溢れ出た。

「詩織さんはきつと戻ると思う」

ドアが閉まる間に聞こえてきた声。

何処に、誰の許へ、いったいいつ頃の自分に？

「とりあえず走ってください」

複雑な気持ちで見送っているに違いない彼女の顔は見ずにそう言った。

ガラス越しに見えるビルの谷間に、先々の暮しを暗示するかのような、確かなブルーに変わりつつある明けの空があった。